

文献抄録

股関節障害患者に対する歩行時の杖の効果

この研究の目的は歩行時の杖の効果を決定することである。被験者は股関節に疾患のある患者 15 名で、補装具を用いずに独歩可能であるが跛行となる患者を対象とし、平均年齢 56 歳、平均体重 77.7kg で Iowa 大学病院の整形外科の患者である。実験器具として、杖、フットプレート、8 チャンネル dynograph recorder、フットスイッチ、腰ベルト、3 対の strain guage を使用した。(strain guage は杖の上部に側方方向に 1 対、前後方向に 1 対、下部に杖軸方向に 1 対セットした。) 歩行方法は杖なし独歩と患側下肢と反対側の手に杖をもった 2 点歩行で、床反力、杖反力、カデンス等の両者の比較を試みた。結果は、杖の軸方向の力の平均の最大値は 11.6kg (体重の 15%) であり、前後方向の杖に加わるトルクは 67kg・cm、側方方向のトルクは 2.5, 1.7, 3.6kg・cm

と前後方向に比べ極めて小さい。従って杖使用の 2 点歩行は下肢の床反力の垂直成分を十分に減じることが可能となる。その他の結果としては、歩行の速度は杖の有無にかかわらず、ほぼ両者同じで、カデンスは杖歩行の方が杖なし歩行に比べ小さい。また、stride length は杖使用の方が長くなり、患側の遊脚時間はやや増大する。本論文の結論として、患側下肢と反対側の手に杖をもった 2 点歩行は患側の足に生ずる床反力の垂直かつ前後方向の成分を減少させるため効果的な歩行であるといえる。

Douglas D. Ely, Gary Y. Smidt: Effect of Cane on Variable of Gait for Patients with Hip Disorders., J. A. P. T. 5, 507~512, 1977.

(東京都養育院付属病院 理学療法士 柳沢 健)

長期入院患者に対する認識治療グループ

第 1 回ヨーロッパ会議のテーマは“存在すべきか、それとも生きるべきか”というものであった。そこで著者は MacKinnon House OT 部門での経験を報告した。

この OT 部門は主として生産的作業を中心に、5 名の職員で約 90 名の患者を実施している。

認識治療グループは女性 1 名、男性 3 名計 4 名の、ほとんどコミュニケーションをとらず職員の働きかけにも反応の少ない慢性分裂病者に対し 5 カ月間実施した。グループの目的は、

1. 患者とコンタクトをつける
2. 自己及び周囲への関心を持たせる
3. 反応やコミュニケーションへの援助

の 3 点である。

グループは現実指向グループと同様の方法を持って進める。視、聴、触、味、嗅覚の 5 感を歯ブラシ、石鹸、食物、硬貨等の日用品を用いて再刺激する。患者は感覚的にそれぞれの体験を持ち、質問に応じてその体験を言語的に表現する。これを毎週 1 回、20 分ずつ施行した。他の日は、患者は集団作業を 1 日中実施している。5 カ

月後、グループ内では自発的な発言や情報提供がみられるようになった。また集団作業の場でも反応が増え、積極的になった。

この変化がグループの活動そのものによるものか、又注目が増大したことによる効果かの判定は困難である。

上記の治療過程を通して以下の問題点が新たに明らかになった。

1. 形態概念の欠如
2. 前景と背景の識別力の低下
3. 材質の弁別力の低下
4. 語彙(ごい)の狭さ

これらのことにより、より著明な不適応行動を持っている患者に対してもグループ実施の可能性があるといえる。

Catherine E. Foster, M. B. A. O. T.: Aware Group with Institutionalized Patients, British Journal of OT, 40(8), 194-195, 1977, Aug.

(国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院 作業療法士 篠田 峯子)